

花火が落ちたら

森宮ゆず

登場人物

男

女

母

六畳ほどの部屋に男とその母がいる。男の年は二十代前半、母親は五十前後である。
男が女に電話をかけている。母はその隣で浴衣を縫っている。

男 ついに明日だよ

女 そう、楽しみだね

男 うん

女 待ってるからね

男 分かった

女 せっかくのお祭りだから

男 分かってるよ

女 ちゃんと待ってるからね

男 はいはい、またね

男、電話を切る。母、縫った浴衣を男に渡す。

母 ほら、綺麗に縫ったから

男 母さん、そんなに手のこんだことしなくていいのに

母 何言ってるの、せっかくのハレの日に

男 だって照れくさいじゃないか

母 そんなことないわよ、気分も晴れやかになるでしょう

男 ……少し、派手じゃないかな

母 そう？ これくらい今時普通だと思ってたわ

男 母さんの今時っていつの話だよ

男と母、仲良さげに笑い合う。話しているうちに男は、眠る。母はそっと男に毛布をかけ、部屋を出て行く。場面変わり、女の部屋。男は女の部屋で寝ている。

女 甘いものが食べたいな

男 今度な
女 あら、起きてたの
男 今起きた
女 もうすぐね
男 そうだね

男、女を抱きしめる。

男 花火を落とすんだ
女 綺麗に咲かせてね
男 ああ、君に一番綺麗に見えるようにするよ
女 私のために落としてくれるの？
男 ああ、だから待って欲しい
女 待ってるわ、いつまでも

女、泣く。男は女をもう一度強く抱きしめる。

男 それじゃあ、墨田川で花火を見よう
女 待ち合わせは墨田川？
男 ああ、迎えに行くから待ってて

男、女に別れを告げ、出て行く。女は男が出て行くと同時に号泣。
場面変わり、男は母に浴衣を着付けてもらっている。

男 やっぱり少し派手じゃないかな
母 そんなことないわ、似合ってる
男 恥ずかしいよ
母 貴方に似合う色なら、私が一番良く分かっているから
男 ありがとう、母さん
母 あの子にいいところみせるんでしょ？
男 そうだね
母 行ってらっしゃい
男 行ってきます
母 ……気をつけて

母の目が潤む。男、出ていこうとするが立ち止まる。

続く―